

電気の ふるさと

Vol.50
2017.12
Winter

わがまち自慢 ～町長室から～

佐賀県玄海町 岸本 英雄 町長

特集 「協働」と「連携」によるまちづくり²³

新潟県燕市・三条市が推進する
地域産業活性化の取り組み

ものづくりの現場を開放し消費者との交流で
産業展開の方向性を見出す

KEY PERSON

吉戸 勝さん (ランドブレイン(株)執行役員)

「小さな拠点・地域運営組織」の重要性

【写真】浜ノ浦の棚田

(玄海町提供:2014年玄海町フォトコンテスト優秀賞作品)





わがまち 自慢

～町長室から～

玄海町データ

【人口】
5,755人
(平成29年10月31日現在)
【面積】
36km²



「ふるさと応援寄付金(ふるさと納税)」の定期便プラン「Premium Genkai」

「ふるさと応援寄付金」
最も人気がある「佐賀牛」



養殖真鯛



ハウスミカン



『さがほのか』

ふるさと納税制度がもたらした地域産業の活性化

おかげさまで、玄海町は平成26年度に「ふるさと納税」による寄付金額が約11億円で全国2位になりました。これによって得られた大きな成果は、単に寄付金額の多さではありません。この制度の活

用により、玄海町の生産者が産品を直接全国の消費者にPRできたこと、産品の販路を拡大できたことです。玄海町はそれまで一次産品で注目を集めることは少なかったのですが、「ふるさと納税」の返礼品として産品を活用したこと

で、全国の消費者に直接産品と情報を届けられるようになり、生産者の所得向上にもつながりました。そして、従来にも増して、地元

が商品開発や供給ルートの改善に熱心に取り組み出したことも大きな成果のひとつです。現在でも、ふるさと納税対策室と生産者の間で密に会議を行っており、新しい商品の企画やクレーム対応などについて議論を重ねています。そのやり取りを重ねる過程で、職員も

生産者も「想い」を共有できていくことが成功のキギでしょう。ふるさと納税対策室の職員は生産者と一緒になって汗をかいてくれますし、そこそが地域を動かす力になっています。

薬用植物の国内生産拠点を目指して

玄海町のふるさと納税の返礼品として最も人気があるのが佐賀牛、2位がハウスミカン、3位がハウスイチゴの『さがほのか』、4位が養殖真鯛です。これらが玄海町の4大産品ですが、これに加えて新たな産業として力を入れているのが薬用植物栽培です。製薬会社や化粧品メーカーの多

くが必要とする薬用植物のひとつに甘草があります。実は甘草の生産拠点が国内にはなく、ほとんどを中国からの輸入に依存しているのが実情です。町内には、もともと多種多様な薬用植物が多く自生していましたので、国内の薬用植物の栽培拠点を目指すとともに、特色のある産業として薬用植物栽培を興したいと考え、その研究拠点として薬用植物栽培研究所(以下、薬草研究所)を設立しました。ここでは九州大学、長崎国際大学と連携した薬用植物栽培の研究に取り組みとともに、農家への栽培方法の指導なども行っています。現在、栽培されている甘草では含まれている有効成分が製薬向けの規格を満たすことができませ

が、将来的には製薬用の甘草を農家でも栽培できるようにしようと、薬草研究所での栽培方法の研究を進めているところです。当面は化粧品向けのトウキ、ミシマサイコなどの薬用植物の栽培に取り組んでいきます。現状では薬用植物栽培に取り組む農家は7軒ほどですが、作付面積は拡大しつつあり、企業からの栽培契約の問い合わせも増えてきています。最近では唐津市と玄海町で、国際的な美容・健康関連産業の集積を目指す『唐津コスメティック構想』の取り組みを進めています。その中核を担う一般社団法人ジャパン・コスメティックセンターが窓口となり、町内の農家が栽培したトウキが化粧品メーカーに出荷されて



玄海町を代表する名勝地「浜ノ浦の棚田」



薬用植物栽培研究所



薬用植物「甘草 (カンゾウ)」



薬用植物「トウキ」

います。将来的には、玄海町が全国的、ひいては世界的な「薬草のまち」として、世の中に貢献していけることを願っています。

人々の活躍と次世代教育 で地域に更なる活力を

玄海町の自慢は一次産品だけではありません。地域を盛り上げようと活躍してくれる若手の人材も増えています。

昨年5月には、ふるさと納税返礼品への参加事業者が地域おこし団体『玄海ホットランナー』を結成しました。彼らは、自分たちの一次産品に誇りをもって全国に発信していこうと、生産者どうしの情報共有や様々なイベントへの出店・販売などの活動に精力を出しています。メンバーはみんな熱い思いを持って活動していますから、それが地域をより生き活きとさせてくれることを期待しています。

また、玄海町はもともとスポーツが盛んなまちでもあります。最近では旅館組合のメンバーがスポーツイベント企画チーム『Make a Dream Genkai』を結成しました。玄海原子力発電所の運転が停止した影響で、発電所作業員を中心とした宿泊客が少なくなっています。そこで、週末にスポーツイベントを開催し、町外からスポーツチームやイベント参

加者を玄海町に呼び込み、宿泊してもらおうというのが彼らの取り組みです。徐々にイベントの知名度も上がってきているのは嬉しいことですね。廃校を利用したイベント、音楽イベントなど、新しい企画のアイデアも様々で、今後の活動の展開が楽しみです。

それから、次世代の育成にも力を入れています。少子化が進み、複式学級で授業を行う学校もあつたため、そのような教育環境を改善しようと、町内すべての小・中学校を統合した小・中一貫校『玄海みらい学園』(以下、みらい学園)を平成27年4月に開校しました。小・中一貫校の非常に良いところは、8年生・9年生が1年生の面倒を見てくれるところです。学校を覗いてみると、そのような光

景をよく目にします。お兄さん・お姉さんぶりたい気持ちもあるのでしょうか、やはり小さい1年生がかわいいのでしょうね。そんな彼らの振る舞いが、学校全体の雰囲気をとて温かいものになっています。

さらに、みらい学園と保育所との間の連携も進めており、みらい学園の先生が保育所にも出入りするようになっています。そうすることで、学校にあがった子供たちも安心感があるようで、実際に学校になじめない生徒が減りました。こうした環境のなかで、豊かな人間性を育み、大人になっていったんは地域を離れてしまっても、「また戻ってきたい」「地元の役に立ちたい」と思えるような地域にしたいと思っています。

「エネルギーのまち」として

「原発ゼロ」という声がよく聞かれますが、原子力発電なしでのエネルギー安定供給は、当分は難しいでしょう。そうであれば、原子力発電所に対する安全性を高めていけるようなまちづくりを、我々が実践していくべきだと考えています。一方で、玄海町では再生可能エネルギー導入に向けた検討も進めており、『次世代エネルギーパーク・あすびあ』での普及啓発も行っています。原子力への安全・安心を高めながら、新エネルギーの導入も模索することで、これからも「エネルギーのまち」として、その安定供給に貢献していきたいと考えています。(談)

地域おこし団体『玄海ホットランナー』



小・中一貫校『玄海みらい学園』



『次世代エネルギーパーク・あすびあ』



特集

「協働」と「連携」によるまちづくり⑬
新潟県燕市・三条市が推進する地域産業活性化の取り組み

ものづくりの現場を開放し
消費者との交流で
産業展開の方向性を見出す



【写真】
1 銅の「鋳起」で有名な「玉川堂」[ぎょくせんどう] (燕市) での見学風景
2 期間中に開催された「燕三条トレードショー」
3 包丁研ぎ体験を実施する「庖丁工房タダフサ」(三条市)
4 国から「伝統的工芸品」に指定されている「越後三条打刃物」
5 「購場」のひとつである燕三条地場産業振興センター

「オープンファクトリー」という取り組みに注目が集まっている。経済産業省によると、この取り組みは、「地域産業の歴史と価値を改めて見直し、地域産業を活性化させ、新しい産業展開の方向性を見出す可能性を秘めている」としている。今回は、新潟県三条市と燕市で開催されている『燕三条 工場(こうば)の祭典』を紹介したい。

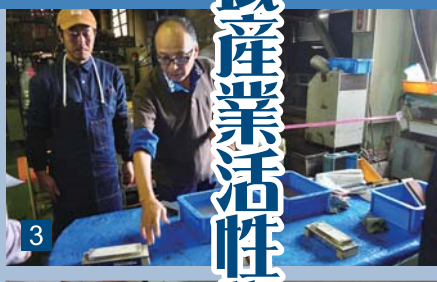
伝統産業の衰退という危機感で
消費者ニーズを探る

新潟県の燕・三条地域は、「叩く」「抜く」「磨く」などの伝統的な職人技を誇る金属成型加工の事業者が集積する「ものづくりのまち」である。

その燕・三条地域で、10月5日から8日までの4日間、「第5回燕三条 工場(こうば)の祭典」が開かれ、県内外から約5万3,000人が訪れた。

このイベントは「工場・耕場・購場」を訪れて、その仕事を間近に見て、対話し、ものづくり体験などに参加して、燕・三条地域の産業を体感することができるというもの。地域内の事業者103社

が参加して、金属加工の製造業をはじめ、木工業、農業、食品製造業、印刷デザイン業など多岐にわたり、他地域にない珍しい取り組み



■燕市・三条市情報■
【人口】
三条市:99,337人、燕市:80,696人
(平成29年10月末現在)
【面積】
三条市:432km²、燕市:110.96km²
【発電所データ】
東北電力(株)笠堀水力発電所(三条市)





「玉川堂」(燕市)の工場



コツコツと音が鳴り響く「玉川堂」の鋳起作業



「玉川堂」の「鋳起銅器」製品。その伝統技術を200年に渡って継承している老舗企業



「玉川堂」は1816年創業。1枚の銅板を叩いて継ぎ目のない急須などを作る高い技術で知られる

みとなっている。そのほとんどが「工場見学」を受け入れ、「ものづくり体験」や「ワークショップ」を開催している。

三条市と燕市の金属加工の歴史は古く、江戸時代初期に、信濃川の氾濫に悩まされた領民を救うため、江戸から鍛冶職人を招き、農家の副業として「和釘」の製造を始めたのが始まり。その後、三条では大工道具や包丁などの刃物に、燕では煙管、銅器、金属食器などの製造に発展して、今では、この地域に約4,000社の事業者が集積している。新潟県全体のおよそ4割の事業者が集中し、「人口比あたり」日本で一番社長の多いま

ち」などとも呼ばれている。特に刃物は「三条の打刃物」、「燕の抜刃物」と呼ばれ、切れ味が良い。その切れ味は長く続き、研ぐことによって再び優れた刃物として蘇る。そしてなにより、風格があることで、プロの料理人に愛されている。

また、燕市の「磨き」は、製品になる直前の仕上げの工程で、「iPod」の「鏡面磨き」に代表されるように、その優れた技術は世界的に知られようになった。さらに、1枚の銅板から小鋳で叩いて壺や急須などに成型する「鋳起」技術も有名である。そうした燕・三条地域だが、昨

が失われていく」という危機感があつた。

また、金属加工業の基盤となる「鍛冶屋」は、商品の販売自体は問屋に頼んでいる小規模の事業者が多く、かつては問屋が商品の企画提案、マーケティングの役割も担っていた。しかし、最近は商品を小売店に卸すだけの問屋が多くなってしまい、「鍛冶屋」はなかなか新しい商品や、売れる商品を作れないという状況に陥った。そうした危機意識の中、業界と行政は、販売戦略の見直しを図り、消費者ニーズを見極めるために、消費者と直接コミュニケーションを取れる機会を探ることになる。

現場を開放して交流を深める 『燕三条工場(こうば)の祭典』を開催

話は、5年前の平成24年に遡る。当時、三条市では前述の背景もあつて、平成19年から「越後三条鍛冶まつり」を開催していたが、「商品の良さを消費者に、どうしたら理解していただけるか」という課題が浮かび上がっていた。そこで「いつそのこと現場を見ていただくほうが、消費者とのコミュニケーションが深まるのではないか」という意見が事業者から出た。「オープンファクトリー」である。事業者はものづくりの現場を公開し、交流することで、自社製

品のや仕事に対する生の声、新たな気づきを得ることができ、来場者にとつても、普段は見ることができない工場現場は、「非日常のエンターテインメント」であり、その価値を知ることができるといふものだ。

それを聞いた当時、東京の外部の相談役であり、現在、「工場の祭典」の全体監修を務めるディレクターから、「もっと大々的な工場見学のイベントにはどうか」という提案を受けることとなる。「モノができる背景にあるコトも



研磨業の後継者育成などを目的に設立された「燕市磨き屋一番館」(燕市)では、研磨された小型ジェット機の主翼が展示されている



「燕市磨き屋一番館」では「いしがた県央マイスター」が指導にあたる

同時に発信していこう」というアドバイスであった。こうして『越後三条鍛冶まつり』

は、「ものづくりのストーリー」を発信するイベントとしてリニューアルされることとなった。

そんなとき、隣の燕市の事業者から、「一緒にやりたい」という申し出があつた。県外の人にとつては三条市単独よりも、「燕・三条」として開催したほうが、知名度もありPRにもなるだろう、ということ、三条市40社、燕市14社で『燕三条 工場の祭典』としてスタートすることになった。

第1回の来場者は約1万人。想像以上の盛況ぶりだった。第2回



「近藤製作所」のモットーは「道具の良さは作業性の良さ」



創業100余年で鍛冶屋としての技術を代々継承している「近藤製作所」(三条市)

「第4回からは、「工場」に「耕場」が加わり、「KOUBA」に対象が広がった。

燕・三条地域では、農業は昔から盛んで、果樹栽培にも力を入れてきた。また、食器を製造していることもあり、「食」というキーワードを通じて金属加工工業は農業とも繋がっている。そういうストーリーを持たせつつ、農業も燕・三条地域の産業の一体としてPRしたいと、農家も「耕場」として対象に加えた。

また、「購入」の場をイベントに組み入れたのは、製品の流通事情により、直接製品を販売できない工場が多い中、工場で作っている製品を購入したいというお客さんの要望をかなえるため、金物の販売を行う小売店を中心に対象に加えた。

第2回からは、工場見学・体験のほかに、様々なテーマを設けたオフィシャルバスツアーも開催している。

「工場で人を繋げる」というコンセプト

第1回の開催から、変わらぬコンセプトは「工場で人を繋げる」というものだ。第1回目の実行委員長で、包丁製造業の経営者である曾根忠幸さんの意見だった。

「このコンセプトは、ものすごく大事なことだと思っています。この地域で作られる商品は、価格帯の高いものが多いので、単純な価格競争では不利です。しかも少人数の事業所が多いので、経営資源が乏しく、新商品を逐一出すことも簡単ではない。それ以外の道で販路を確保するようになったときに、やはり消費者に「ファン」になってもらうことが必要なのです」と語るのは、最初の立ち上げから現在まで携わってきた、三条市商工課の澁谷一真さんだ。

「来場者の数をみれば多いほうが嬉しいですが、単純に数だけでは重要ではありません。どれだけ消費者と職人とのコミュニケーションができたか、ストーリーを伝えられたかなどを、大事にしたいのです」

来場者と思いを共有することに意味があると、本年度の実行委員長であり、金型製造業の経営者

の武田修美さんも口を揃える。

現在、燕・三条には約4,000社の事業者がいるが、今年度は、そのうち103社が第5回「燕三条工場の祭典」に参加した。第1回に比べると大幅な増加である。しかし、すべての事業者が参加すればよいわけではない。多くの事業者のなかで、技術力のない会社もある。そのようなところが参加しても、イベントの質を下げってしまう。

そのため、「工場で人を繋げる」というコンセプトと、5つのステートメントによる行動指針に基づいて、イベントが運営されている。

それは、「①工場（こうば）では誇りを持って何事も全力で取り組む事 ②工場（こうば）でものづくりの本質を人々に体感してもらう事 ③工場（こうば）が活性化することで、地元の雇用に貢献する事 ④工場（こうば）での仕事の子供達にとって憧れや夢となる事」



三条市商工課主任 澁谷一真さん

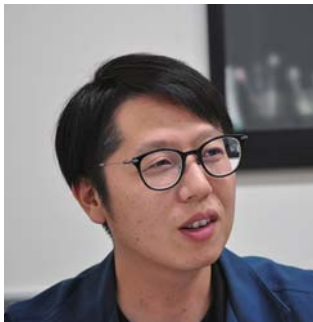
三条に伝わる鍛造技術を継承しながら常に新しいチャレンジを続ける「庖丁工房タダフサ」(三条市)

「庖丁工房タダフサ」会長の曾根忠一郎さん。息子の忠幸社長は第1回の「工場の祭典」実行委員長でもある



る事 ⑤燕三条の工場（こうば）を、ものづくりの聖地にする事」の5つである。

今後、この指針を各工場に浸透させていくことが大事だという。工場で作るものは、最終的に消費者の手に渡るものだ。だが、閉じられた空間からは、「消費者」という存在が見えにくい。それが、工場を開き、消費者と繋がって、消費者のことを考えてモノを作る



「第5回燕三条工場(KOUBA)の祭典」の実行委員長・(株)MGNET代表取締役武田修美さん

目の来場者は約1万2,000人、第3回目は約2万人、第4回目は約3万5,000人、第5回目の本年度は5万人を超える大規模なイベントとなったのである。

第1回の実行委員会事務局は三条市だけだったが、2回目以降は三条市・燕市の行政、それに両市の商工会議所などの出資により設立された公益財団法人燕三条地域産業振興センターが加わって運営することになった。



「耕場」のひとつ「宮路農場」(燕市)



野菜を育てる畑はすべて水田からの転換。主な栽培はアスパラガスの「宮路農場」

ようになる。また、来場者の生の声を聞くことによって職人たちのプライドが高まっていく。そして後継者も育っていく。

こうしたことがこの5年間の成果だと、武田さんは言う。



精度の高い技術力が注目されている「武田金型製作所」(燕市)



創業は1771年。酒蔵から味噌蔵開業の歴史をもつ「越後味噌醸造」(燕市)



金型工場の子会社として製造だけでなく企画・開発・販売などを手掛ける「MGNET」(燕市)

イベントに参加する意味をそれぞれの企業が考える

実は、三条市と燕市は、江戸時代に商人と職人間の商売で、領主に訴えて争ったという経緯がある。今は、燕市と三条市を行き来しないと経済圏としては成り立たず、若い世代にとっては燕・三条の間の壁というのはほとんどない。しかし、一部の年配の世代の中には、まだその壁は残っているようだ。三条市の事業者はマーケティングや商品開発を昔から問屋に依存していたため、相対的には事業者の経営立て直しなどを、自ら積極的に実施していく傾向が少なく、行政も産業の立て直しに熱心だった。

一方、燕市の事業者は、以前から販路開拓や商品開発を自前で行っている事業者が多く、「日本金

属洋食器工業組合」などの大きい組合が燕市にあるなど、製造事業者側が自ら販路開拓に頑張っているまじだった。そのため、行政による事業者への支援がそれほど必要とされてこなかった。

このイベントの開催によって、行政間連携のハードルが相当低くなったと、三条市の澁谷さんは感じている。燕市の事業者さんから行政への働きかけがあったからこそ動けたことも大きい。また、実行委員会のメンバーの平均年齢が40代と若く、一体で地域を盛り上げていこうという気運は高い。

「この地域の地場産業全体の振興を考えていくときに、燕・三条一体で考えられるということが、今や当たり前になりました。これはこのイベントの効果によるものだと思います」と澁谷さんは言う。

第4回までは、どちらかといえば、行政が実行委員会事務局を引っ張ってきたが、第5回では、任せられる部分は事業者側に任せるようにした。「今後はこの取り組みが行政の手をなるべく離れ、事業者だけで回していけるようになれば理想」とのことだ。

ただ、課題がないわけではない。「オープンファクトリー」は、防

塵対策や、製品や技術の情報漏えい防止策など、新たな負担を工場側に課すことが多い。

また、見学の受け入れ人数を超えての来場で、説明ガイドが不足することや、駐車場不足を危惧する工場もある。実際に、オープンにしている工場は全体の数パーセントに過ぎない。

「最終製品だけで伝わらないストーリーをどうやって伝えるかを考えたとき、たどり着く答えのひとつが工場見学です。ただ、必ずしも『工場の祭典』で工場をオープンしなければいけない、という訳ではありません。自分たちがイベントに参加する意味を、それぞれの企業が考えることが大事だと思います」と武田さんは語る。

「オープンファクトリー」は、いわゆる「産業観光」に位置付けられるのが一般的だ。しかし、このイベントは、その括りだけでは捉えきれない印象がある。

「自分たちが大事にし、誇りにしている工場・技術があり、その良さを共有できる外部の人たちに工場を巡ってもらおう」という意味で、実行委員の1人が以前言

っていたのは、「巡礼」という言葉だそう。一般的に巡礼とは宗教の聖地や聖域に参詣して、聖なるものにより接近しようとする宗教的行為を言う。その意味では、技術を極めようと不断の努力をする「造り手」と、それに魅せられた「使い手」が交わる場が、「ものづくりの聖地になる事」を目指す『工場(KOUBA)の祭典』なのだろう。KOUBAは「交場」の意味も持つのもかもしれない。地帯資源という光を磨く人、それに魅せられる人との間に起こる「触発」が新たな価値を生むという意味で、この「交場」は、燕・三条地域で今後どのような「輝き」を見せてくれるのだろうか。



三条市の研修施設で後継者の育成やものづくり体験、総合学習の場として活用されている「三条鍛冶道場」

振興トピックス

このコーナーでは、主に電源地域の地域活性化に向けたソフト事業の話題を取り上げています。今回は福井県敦賀市、山口県上関町、鹿児島県薩摩川内市、愛媛県伊方町の取り組みについて紹介します。



敦賀市シルバー人材センターが中心市街地に『おかずの達人 るくべえ』をオープンしました。

福井県敦賀市 地図 A

敦賀市のシルバー人材センターは、平成29年9月1日、中心市街地の「舟溜まり地区」に、『おかずの達人 るくべえ』をオープンしました。

この事業は、第4次経営戦略（平成28年度から5年間）を策定する中で、女性の創造性の発揮・意見を経営に活かす観点から、平成27年12月に女性役員を座長に、女性会員によるセンター事業検討ワーキンググループを設置、本惣菜店事業が提案されました。しかし、創業するためには店舗の詮索と創業資金が必要となり、これを解消するために、敦賀市の「おもてなし商業エリア創出事業」と国の「地域就業機会創出・拡大事業」に応募し採択されました。

店舗は中心市街地の「舟溜まり地区」に立地し、観光客も訪れる場所となっています。



「にしん寿司」など地元の特産品も販売

また、その店名のとおり『おかずの達人』をコンセプトに、「懐かしいお母さんの味」、「手づくり感」、「安心感（無添加）」のあるメニュー（晴明いなり・昆布巻き・海鮮コロッケ・だし巻き卵等）で、「行列のできるお店」を目指しています。



「懐かしいお母さんの味」が人気

周辺地区の若い世代から高齢者の市民を対象に、敦賀の食材による安全安心な手づくりメニューを提供するとともに、「舟溜まり地区」を訪れる観光客には、地元の「にしん寿司」や「東浦みかんみそ」、「さいみそ」、周辺地域の「三方うめ」といった特産品を販売し、周辺の店舗と連携しながら、その回遊性や滞在を促すことも考えています。

9月2日には、大型クルーズ客船『ダイヤモンドプリンセス号』が敦賀に寄港した際、ロシア人観光客をはじめ、市内を散策する外国人も多数来店しました。高齢者の皆さんが余暇を活用し、今まで培ってきた自慢の料理を現会員と一緒に創造し、働ける職場を提供し、シルバー会員が少しでも増員することも期待しています。

オープンから4ヶ月を迎えましたが、日々、新メニューを考案しながら運営しており、馴染みのお客様も徐々に増え、売り上げは堅調に推移しています。なお、営業時間は11時開店〜16時閉店（食材がなくなりしだい閉店）で、毎週水曜日が定休日となっています。敦賀を訪問した際には、ぜひ「懐かしいお母さんの味」を味わってみてください。

「朝鮮通信使船上関来航図」がユネスコ「世界の記憶」に登録

山口県上関町 地図 B

山口県上関町の超専寺には、「朝鮮通信使船上関来航図」という絵図が残っています。通信使船団の陣形や通信使を接待する港の警護、陸上の施設などが視覚的に表現され、入港の様子を描いた貴重な記録画となっています。町指定有形文化財で、本年10月31日に国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「世界の記憶」（世界記憶遺産）に登録されることになった「朝鮮通信使に関する記録」のひとつです。

彼らは、韓国・釜山から海路で長崎・対馬に入り、瀬戸内海を航行後、関西から江戸へ向かいました。寄港地や宿場では學術、芸術、産業、文化など様々な分野で活発な交流がなされ、一行が通った国内12都府県には、当時の外交文書や絵巻などが残っています。

朝鮮通信使とは、豊臣秀吉の朝鮮出兵により途絶した国交を回復するために、江戸幕府の招聘により朝鮮国が徳川將軍家に派遣した外交使節団で、約200年の間に12回来日しています。

これらの記録を、朝鮮通信使にゆかりのある日本の自治体や民間団体でつくるNPO法人朝鮮通信使縁地連絡協

朝鮮通信使船上関来航図





かつては朝鮮通信使が寄港した上関の港

議会と韓国釜山文化財団が、「世界の記憶」への登録を申請していました。

上関町では、本年の登録決定を記念して11月3日に開催された同町の「愛・ランドフェア」に併せて絵図の実物を限定公開。実物を一目見ようと大勢の人たちが訪れました。来年11月には、上記NPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会が毎年各地で開催している「朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会」が、上関町で開催される予定です。

朝鮮通信使の古文書解読をしている上関町観光協会の安田和幸事務局長は「上関は江戸時代、幕府の上使や参勤交代の九州諸大名、朝鮮通信使、北前船などの往来で重要な港として活気を呈していた。『世界の記憶』登録をきっかけに、多くの方に訪れていただきたい」と話しています。

上関町に残るこの絵図は、風光明媚な瀬戸内海を臨みながら、異文化を受け入れ、日韓の平和の一助を担っていた上関町の貴重な「歴史遺産」となっています。

アンテナショップ「薩摩國」が戸越銀座商店街にオープン

鹿児島県薩摩川内市 地図

薩摩川内市の飲食品を販売する薩摩川内市のアンテナショップ「薩摩國」が、9月1日に東京都品川区の戸越銀座にオープンしました。戸越銀座商店街には約400店が軒を連ねており、その一画で、黒豚、キビナゴラーメン、焼酎などの薩摩川内市の幸・山の幸、約160品目を販売しています。「さつま揚げ」や「きびなごのから揚げ」

は、店内で実演販売されており、揚げ立てアツアツを味わうことができるため、食べ歩き客で賑わう戸越銀座にはぴったりな販売スタイルです。

運営は(株)薩摩川内市観光物産協会が行っています。同協会は、特産品の掘り起し、魅力化、商品開発などの役割を担ってきましたが、県外へのPR、販路拡

伊方町のシンボル・佐田岬灯台が初点灯から100年目を迎えました

愛媛県伊方町 地図

日本で最も細長い半島である佐田岬半島。その先端に位置する佐田岬灯台は、航海の難所である豊予海峡を行き来する船を見守るため、大正7年(1918年)4月1日にその明かりが灯されました。そして今年、初点灯から100年目を迎える節目の年です。

佐田岬灯台が位置する伊方町では、灯台点灯100年に併せて、さまざまなプロモーションが行われました。これまでに、点灯100年を祝うイベント「佐田岬点灯100年祭」や佐田岬の自然・歴史文化と豊かな食を楽しむ日帰りバスツアー

大が課題でした。首都圏での物産展への出品や、小規模ショップへの短期出店などのトライアルを積み重ね、この度の「薩摩國」戸越銀座店のオープンに至りました。

同市は、市街部を悠々と流れる一級河川「川内川」、東シナ海に浮かぶ地形の変化の美しい甌島、豊富な温泉など、多種多様な自然環境に加え、702年には薩摩國の国府が置かれ、後の明治維新へ繋がる薩摩の礎を

「しあわせ岬周遊ツアー」、灯台麓の絶景スポットでのダイナーイベント「南予プレミアムダイニング」などが開催され、大好評となりました。

さらに、



「南予プレミアムダイニング」

築いた歴史と文化を有しています。東京に居ながらにして、話題沸騰中の鹿児島・薩摩川内自慢の産品を手にとってみてはいかがでしょうか。

また、7月にはWebショップ『薩摩國』も開設しており、アンテナショップとの相乗効果での商品PR、販路拡大が期待されます。

Webショップ『薩摩國』：
<https://www.rakuten.co.jp/ekiichi/>



完成した掛川里山栗焼酎『自ら』。右が今年商品化された『初垂れ』



「かけがわ栗焼酎プロジェクト」に参加する市民の皆さん

市民で造った限定ご当地焼酎 掛川里山栗焼酎『自ら』

静岡県掛川市
地図 ⑤

掛川市特産の栗を原料とした焼酎『自ら』の発売が今年も始まりました。掛川は栗の栽培が盛んな地域ですが、近年は後継者不足による栗畑の荒廃や、イノシシの食害に悩まされ、栗畑の放置など荒廃が進んでいました。そこで、市内の有志が集まって立ち上げたのが「かけがわ栗焼酎プロジェクト」。栗畑をはじめとした里山を守り、新たな産品開発で地域の活性化を図ろうと、2009年から栗焼酎造りに取り組んできました。焼酎製造のため、市内の栗農園での草刈り、栗拾い、皮むきまでの作業に、毎年多くの市民が参加しています。

今年の新酒は1,000本の限定で、JR掛川駅構内の『これっしか処』で販売しております。今年初めて商品化された、蒸留過程の初期段階で取れる原酒『初垂れ』は、早くも売り切れ! 限定品ですので、お買い求めはお早め!

DATA
 【お問合せ】これっしか処
 ☎0537-22-1616
 【URL】<http://shop.koresika.jp/>

電源地域情報ひろば

特産品 開発情報



パッケージをリニューアルしました!

復活を遂げた人気特産品!

岩泉ヨーグルト

いわいずみちよう
岩手県岩泉町
地図 ⑥

もっちりとした食感と濃厚な味わいが特徴で、全国的にファンが多い「岩泉ヨーグルト」。その製造・販売を行っている岩泉町の第三セクター岩泉乳業は、昨年8月の台風10号豪雨で被災し、操業停止に追い込まれましたが、約13ヶ月ぶりに復活し、販売を再開しました!

被災前の岩泉ヨーグルトの人気は、その生産が追い付かなかったほど。台風によりすべての工場が浸水し、再開は困難を極めました。各地からの復活を待ち望む声に後押しされ、復活を果たしました。

販売再開は、10月上旬の県内スーパーでの販売に始まり、県外への販売は11月、インターネットでの販売は12月に再開されました。ファンへの感謝を込めて開催された「岩泉ヨーグルト工場まつり」は、復活を待ち望んでいた多くのファンで賑わいました。

奇跡の復活を遂げた「岩泉ヨーグルト」を、ぜひご賞味ください。

DATA
 【お問合せ】岩泉乳業株式会社
 ☎0120-3800-81
 【URL】<http://www.iwazumilk.co.jp/>

山と海が育んだ、ジューシーな肉厚!

お〜い菌床椎茸

ちよう
福井県おおい町
地図 ⑦

豊かな山と海に囲まれ、名水地として名高いおおい町。降水量の多い環境を活かして、きのこ類の生産が盛んです。中でもシイタケは、県内でも有数の生産量で、肉厚の傘が特徴です。

㈱おおいでは、何度も試験を積み重ねた上で確立した独自工程で菌床を生産しています。植菌後約120日間培養管理し、シイタケが自然発生できる完熟菌床に仕上げます。

『お〜い菌床椎茸』は歯ごたえの良さと肉厚にこだわった商品。凝縮されたシイタケのうま味を感じることができ、その品質の良さから京都青果合同市場において西日本一の高値が付いた高級シイタケです。

そのほかにも、『きのこ炊き込みご飯の素』などの加工品や、自分でシイタケを栽培する『錦賞しいたけ』など、ユニークな商品も開発されています。

また、町内にはきのこのミニテーマパーク「きのこの森」があります。園内には、きのこの博物館「きのこのしり館」や、軽食処「きのこ亭」があり、『しいたけカレー』など、菌床シイタケをその場で味わうことができます。



肉厚にこだわった『お〜い菌床椎茸』



高さ30mの展望台「きのこタワー」がシンボル『きのこの森』

シイタケ栽培キット『錦賞しいたけ』



DATA
 【お問合せ】株式会社おおい ☎0770-770-2811
 【URL】<http://www.wakasa-ohi.co.jp>



加古川の新・ご当地グルメ

兵庫県加古川市
地図 H

加古川ギョツとメシ

加古川市内には焼肉店が多く、元祖ご当地グルメ『かつめし』でも牛カツが使われています。肉だけでなくホルモンに至るまで、地元には牛肉食が定着しています。それもそのはず、加古川市内ではブランド牛である加古川和牛が肥育され、兵庫県内産ブランド牛産業を支える「加古川食肉センター」があるなど、まさに「牛肉を使いこなす」まちなのです。

『かつめし』に続く新たなご当地グルメを開発しようと、市内の飲食店経営者、町づくりに関心のある市民が集い、ワークショップや試作、試食会を重ね、各店舗の個性が光る『加古川ギョツとメシ』が開発されました。

この地域に昔から伝わる牛肉の味噌漬けが各店舗共通で使用されている一方、盛り付け、アレンジの方法など、そのバリエーションは様々です。ぜひ一度ご賞味ください！

加古川ギョツとメシ



パンフレットも作りました！

DATA

【お問合せ】加古川観光協会
☎079-424-2170
【URL】<http://gyu-to-meshi.kako-navi.jp/>

大根島の恵みと地元有志のかたで産品開発

「大根島産純米大吟醸 竜溪」・「大根島産焼き蜜芋焼酎 幽鬼」

島根県松江市
地図 I

大根島は、島根県東部の中海に浮かぶ火山島です。火山活動の特徴を残す土（黒ボク土）は栄養が豊富であり、農業に適した土地である一方、農家の高齢化が進み、耕作放棄地も増えていました。

そんな中「大根島の作物を使った特産品づくりで、離農に歯止めをかけたい」と有志が立ち上がり、合同会社『大根島研究所』を立ち上げました。大根島のお米と安納芋を使って大根島をPRしようと、日本酒と焼酎を造ることとしました。いざ開発を進めていくと、造ってくれる醸造メーカーを探すことから始まり、販売先の確保、さらにお酒自体も造ってみたいとどのようになるか分からないなど…、課題山積でした。

しかし、「大根島を盛り上げていこう！」「大根島をもっとPRしたい！」という思いや商工会などの協力を得ながら、平成28年度に「大根島産純米大吟醸 竜溪」が、翌年度には「大根島産焼き蜜芋焼酎 幽鬼」が完成しました。

「大根島産純米大吟醸 竜溪」は、養分豊富な大根島の黒ボク土と地下水で育った食用米「こまる」を使用し、雑味のないすっきりとした味わいの日本酒です。

「大根島産焼き蜜芋焼酎 幽鬼」は、大根島産「安納芋」の糖度をさらに上げるため収穫後6か月間熟成させたものを使っています。そのため、他の焼酎に比べ甘みが濃いのが特徴です。

『大根島研究所』は今後も地域活性化に向け、新たな特産品開発に挑戦していきます。

DATA

【お問合せ】まつえ農水商工連携事業推進協議会
☎0852-55-5978
【URL】<http://www.matsue-renkei.jp>



開発された『竜溪』と『幽鬼』

中城村の新・特産品！

護佐丸の島人参焼きドーナツ

沖縄県中城村
地図 J

沖縄県中城村の特産品である島ニンジン。毎年11月から2月にかけて収穫時期を迎え、その生産量はなんと県内生産量の約7割を占めています。

村では、特産品を活用して地域応援プロジェクトを行っている沖縄県内のパン製造事業者と共同で、中城村産島ニンジンペーストを使った『護佐丸の島人参焼きドーナツ』を開発しました。

『護佐丸の島人参焼きドーナツ』は、冬季に収穫した島ニンジンペーストをケーキ生地練りに練りこみ、表面をチョコレートでコーティングしたドーナツです。しっとりとした食感で、大きさも小さなシフォンケーキほどのサイズ。また、1個130円と破格の値段!! これまでに10万個以上販売しており、子供から大人まで幅広く人気のある商品です!

島ニンジンが収穫される冬季限定の商品となっていますので、この時期に沖縄県中城村を訪れた際には、ぜひご賞味あれ!!

DATA

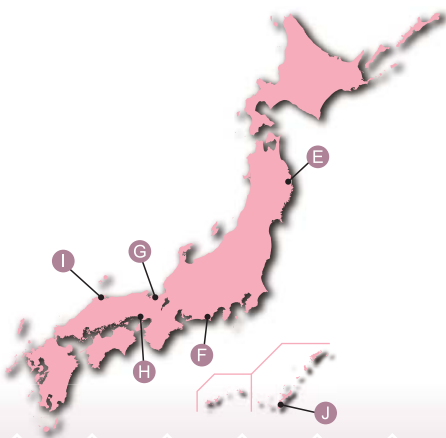
【お問合せ】中城村役場 企業立地・観光推進課
☎098-895-2131
【URL】http://www.vill.nakagusuku.okinawa.jp/topics25yosai.jsp?id_=269



特産の島ニンジン



島人参焼きドーナツ





ツアーの様子

ダム湖にかかる「幻の橋」

旧国鉄士幌線 アーチ橋見学ツアー

タウシュベツ川橋梁は旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群の中でも、特に代表的なコンクリートアーチ橋です。この橋は糠平ダム湖にかかる橋で、ダム湖の水位の季節変動により、その姿が見え隠れするため、「幻の橋」とも呼ばれています。

そんなタウシュベツ川橋梁や周辺の雄大な自然を地元専門ガイドと巡る『旧国鉄士幌線 アーチ橋見学ツアー』が、通年にわたって開催されています。このツアーを主催するのはNPO法人ひがし大雪自然ガイドセンター。「地域の人々や訪れる人々に自然の豊かさや価値を伝え、自然と共生する暮らしや町づくりをめざしたい」と、自然ガイドツアーの開催などに取り組んでいます。

冬季は、凍った湖面に雪化粧した橋が現れるため、見学にはお勧めのシーズンです。この冬は、スノーシューを履いての本格的な雪上ハイキングに出かけてみませんか？

DATA

【開催日】通年
【場所】上士幌町字ぬかびら源泉郷
【お問合せ】NPO法人ひがし大雪自然ガイドセンター
☎01564-4-2261
【URL】<http://www.guidecentre.jp/index.html>

能代の冬の夜を暖かく照らす 第19回のしろまち灯り・冬

「のしろまち灯り」は、秋田県の特産である杉を活用した燈籠などでまちをライトアップするイベントで、平成30年2月で19回目の開催となります。秋田杉をふんだんに使用した能代市新庁舎のライトアップと共に、杉の灯籠や子供たちと作った廃食用油のろうそくなどが灯され、能代の冬の夜を暖かな光が照らします。庁舎周辺には「木育」広場、屋台村などの飲食ブースが設けられ、ミニコンサートも行われます。市内はもちろん、県内各地から協力団体が集まり、能代名物「豚なんこつ」や「だまご鍋」のほか、移動式石焼窯のピザ、蕎麦などを販売して祭りを盛り上げます。今年の開催日は節分の日となるため、豆まきも行われます。

いろいろな灯りと催し物満載の楽しい冬祭りにおいでください。

DATA

【開催日】2月3日(土)
【開催場所】能代市役所 さくら庭および旧議事堂
【お問合せ】のしろまち灯り実行委員会(能登)
☎0185-52-4617



多彩な灯りによる市庁舎周辺のライトアップ



木工教室や木のおもちゃが楽しめるコーナー

湖面に姿を現したタウシュベツ川橋梁



かみしほろちよう
北海道上士幌町
地図 K

電源地域情報ひろば

イベント 情報

もちの大食い挑戦する参加者



大会ではあんこ・ずんだ・しょうゆの3つのもちを食べていただきます



一関の「もち文化」を発信

第11回全国わんこもち大会

いちのせき
岩手県一関市
地図 L

「もち」というとお正月のイメージが強いですが、ここ一関市では、正月や年越しはいうまでもなく、田植えや稲刈りなど農作業や季節の節目、入学式や卒業式、冠婚葬祭にも餅を食べる習慣があります。この地域の「もち暦」によると、その日数は年間60日以上。一関では、餅は暮らしに欠かせないものなのです。

そんな一関の「もち文化」をユニークに発信する、『全国わんこもち大会』が今年も2月に開催されます。おわんに入った一口大の餅を2人1組、または個人でエントリーし、制限時間5分以内に食べた餅の数を競う大会です。

大食いに自信のある方はもちろん、何より餅が好きという方、記録更新に挑戦したい方、はたまた挑戦はできないけれど怖いもの見たさの方もお待ちしております。

DATA

【開催日】2月4日(日)
【開催場所】なのはなプラザ3F(一関市大町4-29)
【お問合せ】第11回全国わんこもち大会実行委員会
(いちのせき市民活動センター内) ☎0191-26-6400
【URL】<https://www.facebook.com/wankomochi>



ダルマ神輿

巨大ダルマが福を呼ぶ 双葉町ダルマ市

ふたばまち
福島県双葉町
地図 N

『双葉町ダルマ市』は、毎年1月上旬の土・日曜日に行われる双葉町の伝統的な祭りです。東日本震災以前は、双葉町のほぼ中心に位置する長塚地区で祭りが開催されていましたが、震災後は長塚地区の消防団員を中心とした『夢ふたば人』がダルマ市の運営を継承し、いわき市南台応急仮設住宅のイベント広場で祭りを開催しています。

祭りの目玉は何といっても『巨大ダルマ引き合戦』！綱をくりつけた巨大ダルマを、南北から約100人ずつで引き合い、勝敗でその年の運勢を占います。「ふるさと双葉町のために何かしたい」「子どもたちにもダルマ市を見せたい」と、避難先からも多くの人々が祭りに駆けつけ、盛会を喜びます。なかには旧友との再会に涙を浮かべる人も…。ダルマ市を通じて、ふるさとを想う気持ちが繋がっていきます。

巨大ダルマ引き合戦



DATA

【開催日】1月6日(土)・7日(日)
【開催場所】いわき市南台応急仮設住宅イベント広場
【お問合せ】双葉町役場 秘書広報課 ☎0246-84-5202
【URL】<http://www.town.fukushima-futaba.lg.jp/>

山あいの村の地域住民手づくりイベント うきさとむらジャンボ七草粥まつり

まつさか
三重県松阪市
地図 O

松阪市の山間にある『うきさとむら』は、かつて宇気郷村と呼ばれた地域にある交流施設です。過疎化に悩む地域に活力を取り戻すために、地域住民が「うきさとむら運営協議会」を発足させ、飲食施設のオープン、食品加工品づくり、イベント開催など、『うきさとむら』を拠点とした村おこしを展開してきました。都市部の人たちの「やすらぎ」の場、また地域住民にとっての楽しみづくりの場となっています。

『うきさとむら』で、毎年旧正月に開催されるのが、『うきさとむらジャンボ七草粥まつり』です。直径1mの大釜で炊かれた約1,000人分の七草粥が、竹の器に盛られて来場者に無料で振る舞われます。地域の方の手作りの素朴な七草粥の味に、心もからだも暖まります。



地域住民でお粥を手作り



大鍋いっぱいの七草粥

DATA

【開催日】2月18日(日)
【開催場所】うきさとむら
【お問合せ】うきさとむらさゆり会 ☎0598-35-0201
【URL】<http://www.mctv.ne.jp/~ukisato/>

歩いて健康!

第26回いぶすき菜の花マーチ

いぶすき
鹿児島県指宿市
地図 P

日本で最も早く「菜の花」が開花する南薩摩路を舞台に、2日間にわたって「いぶすき菜の花マーチ」が開催されます。黄色いじゅうたんのよう広がる菜の花畑をはじめ、知林ヶ島や開聞岳など、大自然の景色を楽しむことができるウォーキングイベントです。

今回は2018年大河ドラマ「西郷どん」放映を記念して、西郷隆盛ゆかりの地「鰻池」をはじめとした絶景を巡る「山川ステージ」、篤姫や濱崎太平次ゆかりの地や湯めぐり街道を歩く「指宿ステージ」の2コースが用意されています。指宿の自然にしみながら歩いて、豊かな心と健康づくりを目指しましょう。

各コース上では市民によるおいしい特産品の振る舞いやボランティアのおもてなしが、大会を大いに盛り上げます。暖かい指宿のまちを、ご家族・お友達と歩いてみませんか？



山川コースから見る雄大な開聞岳



一面の菜の花の畑のなかを散策

DATA

【開催日】1月27日(土)・28日(日)
【開催場所】フラワーパークかごしま／ふれあいプラザなのはな館
【お問合せ】いぶすき菜の花マーチ実行委員会 ☎0993-22-5519
【URL】<http://march59.wixsite.com/nanohana-march>



掲載のご希望がございましたら、電気のふるさと編集室(☎03-6372-7305 E-mail: furusato@dengen.or.jp)までお知らせください。掲載費用が発生することはありません。(編集の都合上、掲載できない場合がございますことを予めご了承ください)



山口市で「地元開催型」の「産品相談・商談会」が開催されました

今年度の8月から9月にかけて山口市で開催した地元開催型の産品相談・商談会では、地域の要望にお応えし、参加事業者の方への事前勉強会を実施したうえで、産品相談・商談会に参加していただきました。

参加事業者向けの事前勉強会の開催は、当センターでも初めての試みとなりましたが、事前に商談の模擬面談をすることで、今後の商談会に臨むにあたっての参考としていただくために開催しました。



事前勉強会



山口市での「産品相談・商談会」

相談・商談会には、山口市、

宇部市、萩市、防府市、美弥市、山陽小野田市、津和野町の7市町から17事業者が参加しました。このように、複数市町村での開催とすることにより、1自治体あたりの費用負担を軽減できるメリットがあります。

ご希望のアドバイザーの派遣や産品開発等に関する講演会、アドバイザーに製造現場を体験してもらったための視察などを組み合わせることも可能です。

地元で開催することで参加事業者の時間的・費用的負担が軽減され、バイヤーの現地訪問により地域の認知度が向上し、実施後も関係の継続が期待されます。

今年度も複数の自治体の皆様、「地元開催型」の相談・商談会事業にお申込みされており、担当までお気軽にお問い合わせください。

【お問い合わせ】

地域振興部 振興業務課

(産品支援事業担当)

☎03-6372-7305

🌐www2.dengen.or.jp/html/

works/hanbai/sanpin.html

✉hanbai@dengen.or.jp



研修No3「企業誘致による地域活性化策を学ぶ」を実施しました

今回の研修では、「先進自治

体の企業誘致部門の課長」「経済産業省の企業誘致関連施策の担当者」「企業経営者」「自治体の企業誘致施策等の研究者」「企業誘致関連コンサルタント」の5名の講師を迎え、企業誘致について、様々な切り口からバラエティに富んだご講義をいただき



研修No4「原子力発電所の廃炉を学ぶ」を実施しました

研修1日目は、座学として「原

子力発電の現状と廃止措置」ならびに「原子力、放射線の基礎知識」、また、翌日の現地見学の事前学習として、「原子力発電所の廃止措置の現状」について受講していただきました。

研修2日目は、日本原子力発電株式会社との東海発電所および東海第二発電所の構

内や乾式貯蔵所(ドライキャスク)を見学しました。東海発電所の廃止措置では、タービン・発電機等

機器は遠隔操作により撤去が既に終了し、



東海発電所

加者からは「作業の具体的手順や、作業ノウハウを知見として今後活かそうとしている事、安全のために努力している事がよく分かった」等の感想が寄せられ

きました。

企業誘致のご担当者を中心に、募集当初の定員をオーバーする53名ものご参加をいただき、講義後の質疑応答も活発に行われ、いつにも増して盛況な研修となりました。

また、第1日目の研修終了後に開催しました参加者間の「情

(平成29年10月19日(木)・20日(金))

現在、減衰期間を経て人が近付けることになった熱交換器の解体が進められていました。機器が撤去されたタービン建屋や解体中の熱交換器に立ち入り、時間の経過とともに放射線レベルが低減していること、先端技術を活用して安全第一に作業されていることを現場で確認し、参

ました。

また、電力会社の参加者からは「廃炉作業のバイオニアとして取り組まれている現場の皆さまと貴重な情報交換ができ、たいへん参考となる。また、こうした研修に参加したい」との感想をいただきました。



講師による講演



講師による講義



研修№5「地域資源を活用した地域ブランド作りと販売戦略を学ぶ」を実施しました

〔平成29年11月1日(水)・2日(木)〕

本研修では、「地域資源」を活用し、食を通じた地域おこし「売れる商品にするための自治体の役割や、事業者の取り組み方」をテーマに講師から、地域資源の発掘から、商品開発、販路・ターゲットの設定、PRまでの一連のポイントや地域商社の役割について、多数の取組事例と併せてご紹介いただきました。



研修№1「ビッグデータを活用した施策・事業づくり」を 今、自治体職員に求められる能力」を実施しました

〔平成29年11月30日(木)・12月1日(金)〕

6次産業化を成功させるために必要なポイントを丁寧にご説明いただくとともに、地域活性化に成功した具体的事例は、参加者から大きな関心を持っていただきました。

ロールプレイの様子



講師による講義

参加者同士の活発な情報交換もなされ、「自治体としての役割」としてどのようにアプローチしたら良いのか」「商品資源は思いつぐが、プロデュースの

また、施策・事業はインプット、業績評価指標はアウトプット、基本目標がアウトカムであり、それぞれが因果関係として

また、地域資源のブランド化において自治体職員が生産者との関係者のつなぎ役となるためのコミュニケーション研修も実施しました。講師自身の成功や失敗の体験に基づく教訓や、ロー

「この研修は中身が濃く、もっと多くの方に受けて欲しい」等の感想をたくさんお寄せいただきました。また、「ワークの時間が足りない」とのご意見もいただき、講師も「データをを使って各自が具体的な計画を作るところまで踏み込むのが本来の研修のやり方だが、今回は時間の制約があり、入口部分で終わってしまった」とおっしゃっていました。来年度の研修に活かして参ります。



グループワークの様子



グループで作成した仮説ツリー

また、地域資源のブランド化において自治体職員が生産者との関係者のつなぎ役となるためのコミュニケーション研修も実施しました。講師自身の成功や失敗の体験に基づく教訓や、ロー

平成30年1月12日(金)の午前9時50分〜午後3時10分まで、東京・築地の全国情報サービス産業厚生年金会館(JJK会館)2階多目的ホールにおいて開催します。



第47回電源地域担当者講習会を開催します

この講習会では、地域振興に係わる国の諸政策や予算、地方創生に関する諸情報についてご説明いただく予定です。

【研修および講習会に関するお問い合わせ先】
地域振興部 振興業務課 (研修事業担当)
☎03-6372-7305
🌐www2.dengen.or.jp/html/works/kensyu/index.html
✉kensyu@dengen.or.jp

電気のふるさと

～電源地域ニュース～ Vol.50

アンケートのお願い

「電気のふるさと～電源地域ニュース～」では、より良い誌面作りのため、アンケートを実施しております。多くの皆様のご意見をお聞かせいただければ幸いです。当財団ホームページより、アンケートのご入力をお願いいたします

【WebアンケートURL】
<https://www2.dengen.or.jp/html/df/form.html>



よしと まさる
吉戸 勝さん

KEY PERSON



「小さな拠点・地域運営組織」の重要性

各方面で活躍する「まちづくりのKEY PERSON」に地域活性化の視点をお聞きしています。今回は、国の各省庁の地方創生関連の調査・政策立案支援業務に携わる一方で、自治体の地方創生総合戦略・総合計画などの各種計画の策定支援をされている吉戸 勝さんにお聞きしました。吉戸さんには、平成30年1月開催予定の当センターの研修No.7「地域住民が主体となる地域運営と小さな拠点づくりを学ぶ」の講師をお願いしています。

地域住民による主体的な地域運営の動き

まるでジェットコースターのスタート・頂上にいるかのように、これからの人口減少・高齢化に対して、多くの人が恐怖と危機感を持っています。

具体的に考えてみると、この影響として、まずは生産年齢人口の減少から「税の減収」が見込まれます。一方で、高齢者の増加に伴う老人保健費の膨張や高度経済成長期に整備した公共施設の更新などにより、歳出面でも非常に厳しい状況が続きます。このような中、地域社会において発生している課題や今後の不安を解消していくためには、資金も人材も有効に活用していく必要があります。

また、市町村合併を経て、同じ自治体内であっても山間部や農村、住宅地に臨海部など様々な地域が含まれるようになり、特に合併された地域では人口の大幅減少も叫ばれています。地域の課題は地域によって異なるため、自治体で一律の政策や支援策ではなく、地域住民が地域の資源を有効に活用しながら、地域に合った形で主体的に策を講じていくことが重要です。

地域の住民や資源を結集させ、そこから生み出されるサービスを効率よく享受しながら、地域で幸せに暮らし続けられるよう、「地域が解決すべき課題」を見つめ、「地域で暮らす人々」の手で、「地域住民の危機感・協力意識」に基づき、地域が主体となって組織的に地域社会づくりに取り組む。そのような事例が各地で増えています。

「小さな拠点・地域運営組織」における『じぶんごと化』の必要性

地域に自治体職員ばかりか若者が少なくなっている中、また自治体の財政事情が厳しい中では、地域住民に

「力」を発揮してもらうことが必要となります。各地から聞こえる声には、「若者がいない」「何もできない」といった“ナイナイ話”が多い中で、「仕事で培った経験を活かしたい」「こんなことをやれたら楽しい」といった声も聞かれます。このような“小さな声”を拾い上げ、個々の住民が有する経験やノウハウ、ネットワークを発掘して組み合わせ、各々が最大限の力を無理なく発揮できる環境や仕組みを整えていくことで、地域としてとてつもないパワーを得ることも可能です。

「就業・雇用」となると最低賃金の支給が必要となりますが、昔取り組んでいた道普請や様々な助け合い活動のように、動機づけやモチベーションの上げ方次第で、地域住民がお金に左右されず、「やりがい・ボランティア」といった形で主体的に展開するよう促すこともできます。

住民は人それぞれ、地域に対する思いや「したいこと」は異なりますが、みんなで地域環境の厳しさをつづさに把握し、「そこにある地域の危機を乗り越えていくのは私(もしくは私たち)である」と強く認識してもらうことで、地域住民一丸となってモチベーションを上げていくことも可能です。

『じぶんごと化』を促す方法

『じぶんごと化』を促す方法には、3つの方法があると考えます。

1つ目は「現実直視」をテーマとしたもので、「今後も人口が減るだろうからなんとなく不安」と曖昧にしてお

くのではなく、データなどを用いて現実や将来の「厳しさ」を数値やわかりやすい指標で伝えることで、強い危機感が生み出され、それが原動力となります。人口の動向や将来予測については、自治体単位ではなく小学校区や自治会単位で正しく捉えるとともに、地域で発生している課題と活用すべき資源についてきちんと棚おろしをすることが重要です。空き家の分布状況や災害時に支援が必要な人、さらには定例化している行事ごとや多様な組織・役職の整理や、「中学生以上全住民」を対象としたアンケートも有効です。

2つ目は、「事例の提示」であり、近隣の地域ないし全国での具体的な取り組みの説明を通して、地域住民同士で「こんなことをしていきたいね」との共感が原動力となります。

3つ目の方法は、「議論による意識高揚」です。地域で展開すべき・展開したい取り組みについて地域住民で議論を行います。必要な取り組みの絞り込みや具体的な取り組みの進め方についてとことん話し合うことを通して、担い手を見つけて、意識・意思を1つに束ねることで、「みんなの思い」を力に変えていくことができます。

以上について、地域の状況にあわせて、選択・組み合わせで地域住民で行動してみることが重要です。

各地で、地域が必要とする「小さな拠点・地域運営組織」の検討・実現が進むように、今後も、地域と行政をつないでいきたいと思います。(談)

略歴

ランドブレイン株式会社執行役員・地方活性化グループ総括。平成23年より社員有志で設立した(特)NPO支援全国地域活性化協議会(ありがとうネットワーク)の理事長も兼務。国の各省庁の地方創生関連の調査・政策立案支援業務に携わる一方で、自治体の地方創生総合戦略・総合計画などの各種計画策定、さらには離島や集落など条件不利地域における各種活動の合意醸成や事業実施なども支援。